（金文追加）

金文（鐘鼎文とも呼ぶ）

青銅器

銅と錫あるいは鉛の合金で鋳造される。大別して容器、楽器、武器がある。

中国の青銅器時代は夏代の紀元前 21 世紀ころに始まった。〈「むかし泰皇（伏羲）は神鼎一つをはじめてつくりました。一つという意味は天地をひとまとめにして、そこにこの世のありとあらゆるものがかたどられている、ということです。黄帝は宝鼎三つを作りまして、天地人にかたどりました。夏の禹は九州（中国全土）に命じて集めさせた金（青銅）をもって九つの鼎を鋳造しました。・・・九鼎は夏、殷、周と伝えられました。・・・」（『史記』「封禅書」より）〉九鼎は王権の象徴であった。

青銅器は王権の象徴から祭祀道具、宣誓施記念物を経て日用品として生活に使われるようになっていった。殷代晩期から西周前期までが最盛期、戦国時代から秦漢時代にかけ鉄器が普及し青銅器時代はしだいに終わりを告げていく。鉄器の普及により、それまで不可能だった石刻文の建立が可能になり、秦代以後文字の主役は青銅器から石碑に移行していった。

殷周の徽章文字

各期金文の特徴

殷代　「波磔体」と呼ばれる「肥筆」や「波磔」がある。露鋒が多い。長方形が多く字に大小がある。字間はつまっている。絵画的。文字または図象銘（記号）は 1 から 20 字程度。

西周初期　殷代のまま。「波磔体」　大盂鼎など

西周中期　「波磔体」がひかえめになる。柔和でおだやかな書風。　衛盉など

西周後期　「波磔体」はなくなり、西周独自のものになる。筆画の太さ同じ。大小の差をつけず同じ四角の中に収めている。小篆に近い章法。　毛公鼎など

落款

書画に押される印や署名の総称。「落成款識」の略。「落成」はできあがったこと、「款識」は青銅器などに彫られた文字のこと。「款」は陰刻の銘、「識」は陽刻の銘のことといわれている。また「識」は「しる」「しるす」「しるし」などの意味があり、青銅器に刻んだ文字を「識文」ともいい、はっきりとしるし、書きつける意味に用いる。

殷金文（青銅器の銘文は殷代中期に始まった。その礼器を用いた一族の標識を記したものがほとんどである。銘文の内容は族徽・族名・作器者・受祭者名などである）

盂　図象銘　鉢

司母戊方鼎　図象銘（図象記号、図象文字、族徽などとも呼ぶ）1938 年殷墟から発見。高さ 133ｃｍ重さ 875 キログラム。族徽は一族の標識のこと。「徽」とは「美しい」「よい」という意と「しるし」の意がある。「鼎」は食物を煮るのに用いた土器や金属の器。一般に三本脚であるが、方鼎は四本脚である。「夏の兎王が九鼎を作り、王室の宝とした故事から」王位の象徴となった。

婦好三連甗　図象銘か？「婦好」の銘。殷墟の婦好墓から 1976 年に発見。甲骨文字の第一期ないし第二期のころのもの。「婦好」は武丁の妃。中国最古の女性将軍。

戍嗣子鼎　1959 年発見。殷晩期。成文銘。26 文字＋図象銘。高さ 48 センチ。

丙午王商戍嗣貝萠才𡨦
宰用乍父癸寶𩰫隹王
𡨦𡨦大室才九月〈圖象銘〉

戍嗣子鼎

丙午の日、王　戍（武官名か）嗣子（族名か・合文）に貝廿朋を賞せり。□（地名）の□（宮室名か）に在り。（戍嗣子は）用って父癸の寶鼎を作る。惟れ王　□の大室に就（？）す（ときなり）。九月に在り。犬魚（図象銘・族徽）

西周金文（王室で作られたものと、地方で作られたものがある）

大盂鼎　西周初期（康王時代・前 11～10 世紀ころ）　19 世紀初に発見。中国歴史博物館蔵　19 行 291 字　内側の腹壁に鋳込まれている。重さ３００kg 余？　殷が天命をおとしたのは、みな酒におぼれたからだとし、文王が天命を授かったと述べている。

※金文の筆順　決まりはない。基本的には甲骨文字と同様
上→下　左→右　外→内　内→外
外から内へが物の形を象った篆書独特の筆順である。空間の分割に注意して、形が取りやすいように書けば良い。

※金文の接筆　深くしっかり接合して、力強さを出すことが大切。

衛盉　西周中期（穆王・恭王時代・前 10 世紀ころ）　1975 年陝西省岐山県で発見。周原博物館蔵　132 字　水器　土地の譲渡にかかわる契約を記した銘文。蓋の内側に刻まれている。物と田を交換した状況が記してある。

毛公鼎　西周晩期（宣王時代・前 827 年ころ）　道光末年（清代末）陝西省岐山県で発見。台湾の故宮博物院蔵。32 行　497 字　高さ 54 ㎝　口径約 48 ㎝　重さ約 35kg　周王が家臣の毛公に与えた鼎。周王が毛公に下した指示が書かれている。王は国の乱れを嘆き、毛公に命じて礼の国を復活させようとした。約二百年前の大盂鼎のような肥筆はほとんど消えている。

原寸

（冒頭部…14 ページ）

隹（惟）九月。王才（在）宗周。令盂。王若曰、時は九月。王（周の康王）は宗周に居られた。王は（臣下の）盂なる者に命令を下した。その際、王は以下の如くに言われた。

（左図・文末部分）

…盂用對王休、用乍（作）且（祖）南公寶鼎。隹（惟）王 廿又（有）三祀。

…盂は、王からの賜与に応えて記念するために、祖先たる南公を祀るのに用うる宝鼎を作った。これは王が即位されてより 23 年目にあたる年の出来事である。

原寸

（冒頭部分…15 ページ）王若曰、「父厂。不（丕）顯文・武、皇天引、王若曰く、「父厂よ。丕顯なる文・武（文王・武王）は、皇天引しく（周）王はこのように仰せられた。「父厂よ。皇天は輝かしき文王・武王の徳に久しく（満足され・・・）

（左図・文末部分）

歳用政「毛公厂對□天子皇休。用作尊鼎。子々孫々永寶用。」

（用歳用政）毛公厂、天子の皇休に對揚して、用って尊鼎を作る。子々孫々永く寶用せよ。

（用って歳り用って征せよ）毛公厂は天子の大いなる賜り物に感謝し称揚した。それを紀念するため立派な鼎を作る。子々孫々に至るまで永く宝用せよ。

紀元前 8 世紀ころになると周王朝の権力は失墜し、諸侯が覇を争う群雄割拠の時代が到来する。文字表現も地方色が強まってくる。西周代は鋳込んだ「鋳款」がおおかったが春秋戦国時代になると刻み込んだ「刻款」が多くなる。戦国時代あたりから書写素材は甲骨、青銅器から石、玉、布等に多様化し、磨崖碑や石碑、帛書などが現れる。神への問いかけだった文字が、人と人との情報伝達の道具として一般化してゆく。

東周金文

秦公キ

戦国時代？・秦の景公（在位前 576－前 537）時代のものと推定される。
1923 年甘粛省で発見。中国歴史博物館蔵（北京）食品を盛るための容器。
蓋に 5 行、本体に 10 行計 123 字書かれている。（16 ページ）
内容は、秦公が祖先からの遺命を守って万民を正しく導き、秦に従わぬ国を討ち、祖霊を守るという誓の文。文字はのびのびとしている。まったく同じ字が二度使われている。（秦・公・不・朕・皇・祖など合計 12 種類）活字のようなものを使用したと推定される。活字もしくは印鑑の起源とも考えられる。

―蓋銘―
咸畜胤士𦉢〻文武鋘靜不
廷虔𢿱𣪘祀乍𠧪宗彝𠂤
邵皇且𡉚嚴𢿱各𠂤𢿱屯
魯多釐𤰈壽無彊畯寔才
天高引又慶竈囿四方𡉚

眉壽（原寸）

「咸く尹士を畜め、藹々たる文武もて、不廷を鎮静し、虔んで朕が祠を敬まん。□宗がために彝を作り、以って皇祖を招く。其れ嚴として□格し、以って純魯多□を受け、眉壽無疆たらん。駿く□まりて天に在りて、高引に慶有り、四方を竈囿せんことを。宜。」

「尽く百官を糾合し、多士済々たる文武の人材をもって奉わぬ輩を鎮圧平定し、虔んで我が国の祭祀に勤めよう。□宗のために礼器を作り、それを用いてご先祖を招く。（ご先祖が）おごそかにご降臨になり、多大なる神祐を授かり、限りなく長寿でありますよう。長く秦公の位を保ち、いつまでも幸いがあり、普く天下を領有できますように。宜」

楚王アンカン鼎銘（16 ページ）

戦国時代？楚の通行体？
1933 年発見　天津歴史博物館蔵
器蓋各 33 字

※歳嘗は秋の収穫祭。その礼器として用いられたものと考えられている。

正月吉日（原寸）

楚王酓志戰隻兵銅正月吉日
窒盥𩰫鼎盍㠯共戴嘗
但不吏森𦍒苛燕爲之
𠬝脰

楚王なるアンカン戦いて兵銅（青銅の武器）を獲たるをもって、正月吉日、
□鼎の蓋を作？鑄す。以って□（肉の切身）の嘗に共せん。・・・
楚王アンカン戦いて兵銅（青銅の武器）を獲る。正月吉日、□鼎（足ながの鼎）の蓋を室鑄し、以って歳嘗に供す。・・・・之を為る。

欒書缶　（16 ページ）

春秋時代（前 6 世紀初ころ）　晋　中国歴史博物館蔵

西周金文に近い書体。

景公に仕えた晋の将軍欒書が作ったもの。

祭祀用の酒器。鋳銘ではなく刻銘に金象嵌の技法が使われている。

眉壽（原寸）

→書之子孫。萬𦍒(世)是寶。
皇祖。盧(余)以祈眉壽。欒
金。以釵鑄缶。以祭我
余畜孫書巳(以)敦(擇)其吉
正月季春。元日己丑。

（器銘）5 行・40 字　左から読んでゆく。

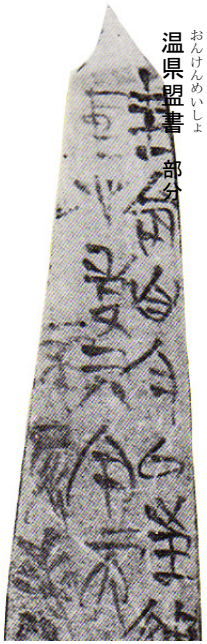
（器銘）　正月季春、元日己丑なり。余　畜（孝）孫の書（欒盾の子の欒書）以て其の吉金を択び、以て缶を作鋳す。以て我が皇祖を祭り、余以て眉寿を祈る。欒書の子孫、万世是れ宝とせよ。

（蓋銘）　元日己丑。正月季春。

※　晋は家臣の「六卿」の対立内紛により前 453 年に韓・魏・趙の三国に分裂した。一般にこの分裂以降を戦国時代と呼んでいる。「侯馬盟書」（５ページ）を参照。1965 年晋の都があった山西省侯馬市の晋城遺跡から晋の家臣たちが取り交わした盟書が発見された。盟書は誓約文で肉筆である。当時の日用的な文字と思われる。起筆を強く打ち込み、収筆を細く払う書き方は楚の竹簡に似ている。「楚簡」「楚帛書」（21 ページ）参照。画像を送った。「楚竹簡」長沙の仰天湖より出土。戦国期のもの。「楚帛書」は戦国期（前４～前３世紀）のもの。**楚簡の**「包山楚墓竹簡」（6 ページ）は戦国時代中期のもので、日常の通行体である。

※　**睡虎地竹簡**（21 ページ）　前 217 年以前　隷書　1975 年湖北省雲夢県の睡虎地 11 号墓から 1150 点に及ぶ竹簡が発見された。墓はその地域の秦の官吏だった喜という人のものだった。竹簡は喜の個人的な所有物であったもので秦代の法律などの抜粋か書かれていた。

竹簡の長さ 23.1cm～27.8cm、幅は 0.5cm～0.8cm。冊だった縄痕が残っている。現在最古の法律条文。起筆の大部分はそ蔵鋒で篆書の影響が強い。字形は円みを帯びた縦長が多い。水平、右上がりなど様々。線は隷意を帯びた線と篆書のような線が交錯している。しんにょう等につづけ書きが見られる。一字の構造は縦画を主としたものが多く、小篆風だが、線に強弱、抑揚が現れ始めている。右回転の大きなもの、波磔が現れ、波勢を感じるものもある。起筆部の強い逆入の技法の初めての例。隷書式の転折のはじまり。



温県盟書部分

長沙子弾庫楚帛書・乙　　戦国時代中期から晩期(前４～３世紀)　縦 38ｃｍ横 47 ㎝ほどの絹の断片に約 600 字の文字と絵が描かれている。

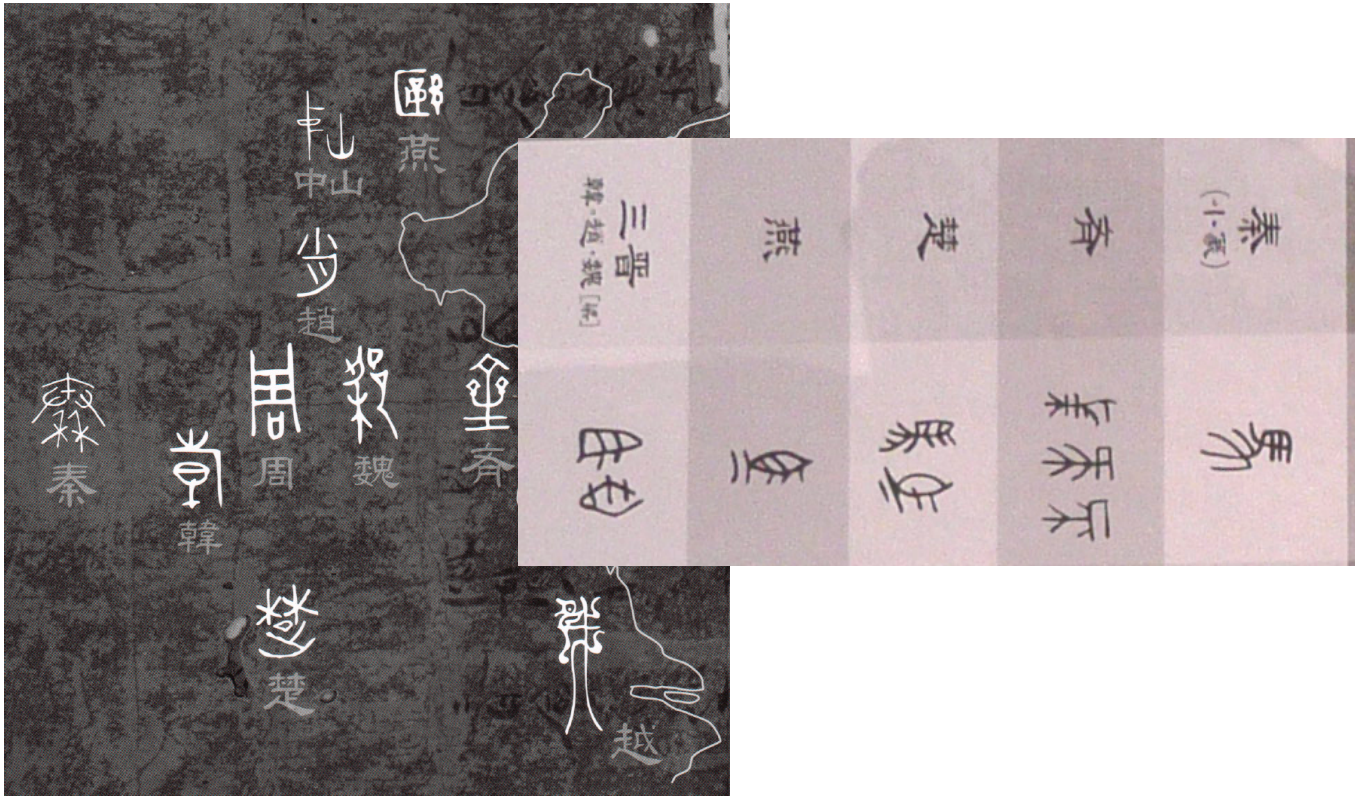
この竹簡より少し前の（前 309 年以後）作と思われる（戦国時代中期・秦）四川省青川県で発見された「青川木牘」では、隷書式の「さんずい」「しんにょう」が見られる。隷書のはじまりは戦国時代であると考えられる。

秦隷（しんれい）の伝説　　程邈（ていばく）による隷書考案のエピソード（監獄の事務官であった程邈が囚人になったときに隷書を考え出した）

※　侯馬出土の盟書は計 5000 点あまりになる。それらは先の尖ったものや、円形や四角の玉（ぎょく）や石などに書かれている。書写には朱や墨が使われている。通常は朱が使われたようである。長さ 32ｃｍ、幅約 4 ㎝から長さ 18 ㎝、幅約 2 ㎝くらいのものまである。字体は春秋晩期の金文に近い。盟約が結ばれた背景には、血縁中心の社会から個人を単位とする社会に変化し始めた事実があった。

※　「牛耳（ぎゅうじ）を執（と）る」「牛耳る」の由来

戦国時代各国の漢字



越王勾践の銅剣（16ページ）

春秋時代末（前5世紀前期ころ）　越　1965年湖北省江陵の楚の遺跡から発見された。

2行・8字

南方特有の「鳥書体」（鳥の姿を組み込んだ形がところどころにある。「鳥篆」ともいう）複雑な筆画で曲線が多く装飾的。「鳩践」は古くは「勾践」と同音だから勾浅が作らせた銅剣だと考えられている。刻銘であろう。句践とも表記される。

長さ55.7cm幅4.6cm　重さ1ｋｇ

※　「鳥書体」や帛書や『楚辞』が表すように長江流域の呉・越・楚の文明は中原とは本質的に異なる文明だと思われる。長江流域の気候風土が華麗な長江文化（楚文化）を生み出したと思われる。また呉や越は名剣の産地であった。

※　呉越戦争（前496年？―前475年）　西施と呉王闔閭の子夫差

※　「臥薪嘗胆」の故事　呉の夫差と越の勾践

※　「呉越同舟」「会稽の恥」

「鼎の軽重を問」の故事　　晋の景公に勝った楚の荘王（在位前613年―前591年）が無礼にも周の宝器たる九鼎の大小・軽重を問うた故事。大軍を率いて洛陽の近くまで進軍（前606年）し観兵式を行ったときのでき事。その後北上して晋を破り（前597年）覇者になったとされる。「鳴かず飛ばず」の故事。

越王鳩践　自作用剣

越王鳩践　自ら用剣を作る

呉越戦争　春秋時代末　呉と越の覇権争い　大国晋と楚の争いに巻き込まれたのが発端

前 506 年　呉王闔閭は楚の都を陥落させた。楚の昭王は脱出し秦に援けられた。

前 497 年　闔閭は越を攻撃。越王勾践は軍師范蠡の策で呉軍を撃破する。

前 496 年　勾践呉を急襲。呉は敗れ闔閭は翌年戦傷がもとで亡くなる。闔閭の子夫差は勾践を怨み復讐を誓った（臥薪）

前 494 年　呉王夫差は会稽山で越を破り、越は呉の属国となり（会稽の恥）、勾践も范蠡も夫差の奴隷となって命をとりとめた。勾践は屈辱を嘗めながら復讐を誓った（嘗胆）その後呉を弱体化させるため夫差のもとに絶世の美女西施が送り届けられ、夫差は虜になる。
離宮造営、覇者になるための度重なる出兵、伍子胥の処刑など（人材の弱体化）により呉の国力は疲弊していった。

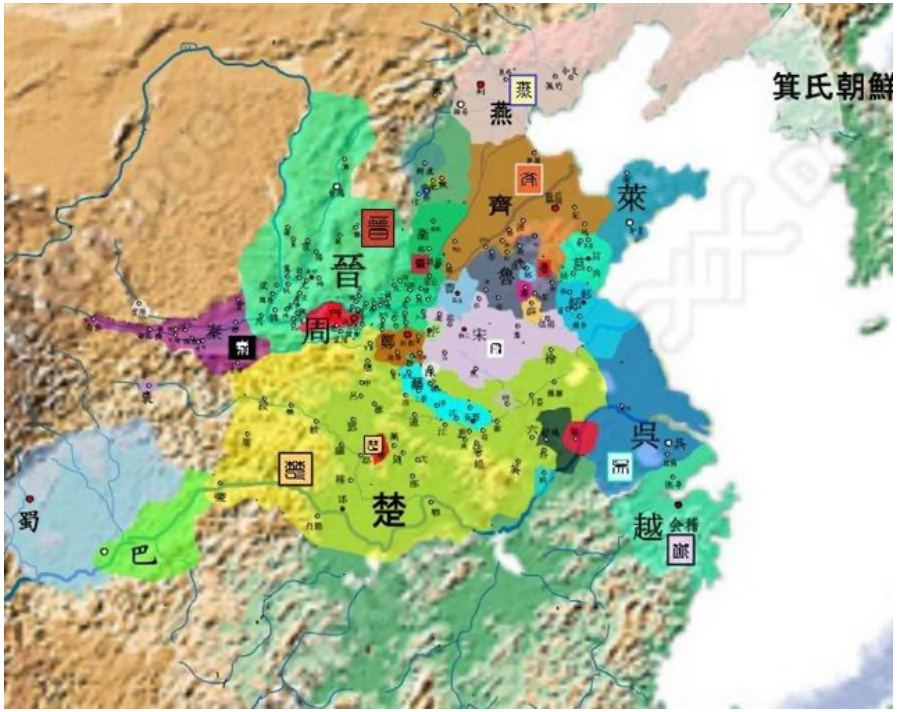
前 482 年　呉は斉を破り呉の夫差は晋・魯・周を交えて黄池で会盟を行った。夫差が留守であると西施から報告を受けた勾践は呉への出撃命令を出した。覇者になることをあきらめて慌てて帰国した夫差は気力をなくし西施と荒淫にふけり腑抜になっていった。

前 475 年　勾践、呉に出兵、三年にわたる包囲のすえ夫差を捕らえた。夫差は自害し立国から 114 年で呉は滅亡した。越は一時覇者になったがその後楚に滅ぼされ、中国の南半分は楚の支配下に置かれることになる。

その後の西施の運命は？

春秋の五覇（前 685 年～前 465 年）

春秋時代に周王朝に代わって天下の事を取り仕切った五人の諸侯。秦の穆公、宋の襄公、斉の桓公、晋の文公、楚の荘王、呉王闔閭、呉王夫差？越王勾践



紀元前 580 年頃の東アジア勢力図

曾侯乙編鐘（そうこうおつへんしょう）　（17 ページ）

戦国時代前期（前 5 世紀）曾国の銅器。楽器。1978 年湖北省隨県で発見。

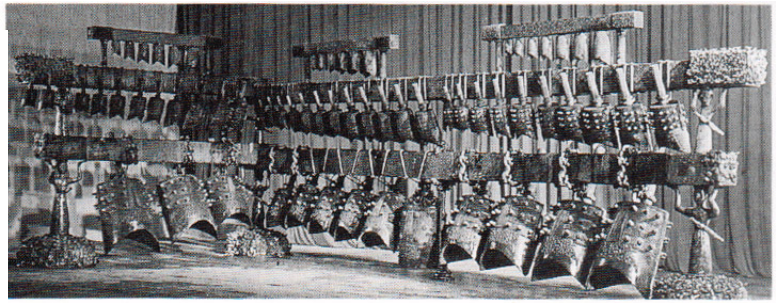
湖北省博物館蔵

高さ 153.4cm 重さ 203.6kg の最大のものから高さ 20.4cm 重さ 2.4kg の最小のものまで合計 65 個(64 個を 65 個に訂正)が組み合わされており、全体の重さは 2500kg ほどにもなる。250 個近い部品に取りはずすことができる。ある鐘は 136 枚の鋳型を必要としたと推定されている。

銘文は鐘の出す音の高さを象嵌の文字で記している。鳥虫篆風の文字である。曽は楚国の属国であり、楚の文字の影響を受けたと思われる。

※　5 音音階、7 音音階、12 平均率に匹敵する独自の 12 律が存在していた。転調の発想もあった。音域は 5 オクターブに達しすべての音に音名が付けられ、高度な音楽理論があったと思われる。「鐘双音」といって 1 つの鐘で 2 音が出せる。図版の上段「鈕鐘（ちゅうしょう）」19 鐘、中段「甬鐘（ようしょう）」33 鐘、下段「甬鐘」12 鐘、下段中央の「はく鐘」1 鐘編鐘は中国全土で 400～500 組出土している。編鐘は西周初期（約 3000 年前）には作られていたと思われる。

編鐘



書き下し　（徴増は）獸鐘の衍徵、濁坪皇の商、濁文王の宮、濁姑洗の下角、獸鐘之敔(書・衍)唆(徵)、獸(濁)坪皇之商(商)、獸(濁)文王之宮、獸(濁)割(姑)肄(洗)之下角、

左から大盂鼎・毛公鼎・小篆の比較

天・大・王・有・受

象形的な肥筆、波磔がなくなっていく過程が分かる。

鄂君啓節（17 ページ）

戦国時代中期（前 323 年）　楚 1957 年安徽省寿県で発見。31 ㎝×7.1cm　9 行 164 字

金象嵌　楚国が鄂君啓に与えた関所の通行手形（符節）　割り竹の形をしている。

貨物輸送免税証明書である。舟用のもの（舟節）と車用のもの（車節）のものの 2 種類がある。

（銘文の内容）楚の王族で鄂（地名）という地方の領主であった啓に今後一年間の物資輸送の際の免税特権を王が与え、各地の関所通行の際にこれを見せれば税を徴収しないというものである。輸送に関する規定が記されている。有効期間は一年で、通行する範囲や所有の輸送船が 150 隻を超えてはならないとの規定が書いてある。

大司馬昭陽、敗晋師於襄陵之歳、夏尿之月乙
亥之日、王処於茂郢之遊宮。大攻尹脽以王命々
集尹逆愆𦍒、裁尹逆、裁令阮為鄂君啓之府更鋳
金節。屯三舟為一舿、舿五十舿、歳能返。自鄂往、逾沽、
上灘、更屑、更芑陽、逾灘、更毋、逾夏、入邸、逾江、更
彭徃、更松陽、入瀘江、更爰陵。上江、入湘。更蹀。更
溯陽、入澑、更鄙、入濟、沅、澧、澹。上江、更木閘、更郢。
見其金節、則毋征。毋舍梓飤。不見其金節。則征。
如載馬牛羊以出入閘。則征於大府。毋征於閘。

（文頭）大司馬の昭陽が晋の軍隊を襄陵で破った年

原寸

中山王サク方壺（17 ページ）

戦国時代中期（前 314 年）　中山国の銅器

1977 年河北平山県中山国王墓から出土。

河北省文物研究所蔵　高さ 63ｃｍ　全 4 面計 450 字

これは第 1 面 120 字である。刻銘。

筆で下書きしてから刻したと考えられる。

燕との戦いに大勝し、その戦功を記したもの。

佳十四禾中山王譽命相邦賈
𩰫郾吉金鈇爲𩰫壺節于醒醮
可𪓐可尙𠂤卿上帝𠂤祀先王
穆〻濟〻嚴敬不敢𩫖荒因𠦪所美
卲大皇工諏郾之訛𠂤懲𠦪王
隹鮀皇禝文武趄禝成考是有
䏣惠涅𢘅𠂤阤及子孫用隹鮀
所放慈孝褱惠樂孠連能天不
臭其有忘連叟孠在𤞷猛賈𠂤
輔相毢身余智其忠誨旆而譌

惟れ十四年、中山王なる譽相邦(相國=宰相)の賈に命じ、燕〔より獲たるところ〕の吉金を擇び、彝壺を鑄爲らしむ。醒・醮（ともに祭儀）に節〔度〕あらしめ、濟る可く尙ぶ可く、以つて上帝を饗し、以つて先王を祀り、穆〻濟〻として嚴かに敬み、敢へて怠荒せざらむ。因りて美むる所を載せ、皇なる功を昭らかに希（肆）べ、燕の訛を詆り、以つて嗣王に懲（警）す。惟れ朕が皇祖なる文武（文公と武公）・趄祖（趄公）と成考（成公）、是（寔）に純德・遺訓有りて、以つて子孫に施及せり。用つて惟れ朕の倣ふ所とせるなり。慈孝寬惠にして、賢を擧げ能を使ふ。天 其の顧有るを斁はず、賢在（才）にして良佐なる賈を得さしめ、以つて厥の身を輔相しむるなり。余 其の忠誨（信）なるを智（知）り、〔之に邦を〕譌（專）〔任〕す。……　＊全四面計四五〇字中第一面一二〇字掲載

〈銘文選八八一〉竹内訳

原寸（部分）

石鼓文（20 ページ）

戦国時代中期（前 5〜前 4 世紀）　秦　北京故宮博物院蔵

唐初（7 世紀初）に陝西の陳倉の田野で発見され、詩人らの詩によって存在が広く知られるようになった。10 石からなる、各々高さ、直径とも 60〜70cm、重さ 1 トン前後の石刻。胴の周囲に 1 字の寸法 4〜5 ㎝の文字が刻されている。700 字以上あったらしいが今は 272 字のみである。1 句 4 文字の狩猟に関わる詩がそれぞれ 1 篇ずつ刻まれている。

読み追加　　第 1 鼓（車工篇・吾車篇）

吾が車は既に好く、吾が馬は既に（「馬編に缶」んなり。）

※　秦は周が東へ移ったあとに周があった土地を与えられた国であったので、石鼓文には西周で使われた文字の影響が強く反映された、後の泰山刻石に近い、力強い書風である。

※　石鼓文を大篆また籀文ともいう。大篆と呼ぶのは、西周の宣王（前 9〜8 世紀）の時代に大史・籀が公式文字、籀文を定めた時に編纂した書物の名が「大篆」といったからだと伝えられている。石鼓文はその大篆を受け継いだものと考えられている。

※　文人たちは古代への憧憬を込めて石鼓の文を読み、文字を学んだ。石鼓の存在は、唐の韋応物や韓愈の「石鼓歌」などによって広く知られるようになった。宋の蘇東坡にも「石鼓歌」がある。詩人たちは古代文化の神髄に触れえたよろこびを述べている。

韓愈の「石鼓歌」より石鼓文の書体の形容をするか所

字體不類隸與蝌　字体は隸と科とに類せず

年深豈免有缺畫　年深くして豈欠画有ることを免れんや

快劍砍斷生蛟鼉　快剣　斫り断つ　生蛟鼉

鸞翔鳳翥衆仙下　鸞翔けり鳳翥って衆　仙下り

珊瑚碧樹交枝柯　珊瑚碧樹　枝柯を交う

金繩鐵索鎖鈕壯　金繩　鉄索　鎖紐すること壯なり

古鼎躍水龍騰梭　古鼎　水に躍って　竜は梭を騰ぐ。

書体は隸書にも科斗書にも似ていない。年経るままに文字の欠けたところができているのは致しかたがないが、切れ味のよい剣が生きている「みずち」や、「わに」を斬りはなしたようなところがある。鸞や鳳が空をかけって仙人たちが天降るようでもあり、珊瑚や碧樹が枝をまじえているようでもある。　鉄の縄でがっちりとしばりつけたようでもあり、古い鼎が水より躍り出るがごとく梭に化けた竜が昇天するがごとくでもある。・・・

※　夏目漱石は『こころ』の装丁を自らし、装丁に石鼓文を用いた。岩波書店の漱石全集に石鼓文が用いられている。

筆順は決まりなし。形がとりやすいように、書きやすいように、分間布白（空間の分割のこと）が均等になるように書けば良い。まだ字界が厳格に成立していない。線には細太がない。運筆は等速等圧が原則。

漢字の歴史は公的に使用された正式字体から六つの段階に分けることができる。

殷代の甲骨文、周代の金文、戦国時代の金石竹帛文、秦の小篆、漢代の隷書、魏晋代以降現代までの楷書。

戦国期の秦で秦隷が生まれたと考えられるが、篆書体の隷書化のことを「隷変」といい、隷変以前を古文字時代、以後を今文字時代と大別される。漢字の歴史は秦の小篆と秦隷を分水嶺に大きく前後に分けられるのである。秦の中国統一（前 221 年）以前を先秦時代といったりするが小篆以前の古文字時代の文字は、書写材料にしたがいおおよそ「甲骨文」「金文」「簡帛文」の三種類に別けることができる。

※　「簡帛」とは簡牘と帛書とを略した呼び方。「簡牘」とは竹簡・木簡・木牘の総称。「簡」は細い竹や木の札のこと。「牘」とは簡より幅の広い札のこと。「帛」とは絹布のこと。「帛書」とは帛に書かれた書物のこと。

※　簡帛に書かれた文字資料には「古書」と「文書」があり、「古書」とは先秦時代の書籍で諸子百家の著作である。それらは長文が多く「冊書」に書かれている。「冊書」とは竹簡を紐で結んで巻物状にした書物のことである。「冊書」は戦国時代にはかさばらない大きな正方形の帛に書かれるようにもなった。「文書」とは行政文書のこと。現在発見されている先秦時代の文書はすべて簡牘を用いている。

※　戦国時代には行政制度が発展し、封泥、印鑑制度や郵送制度などの新しい制度が生まれた。中国的国家の基本が形成されたこの時代は簡牘に書かれた文書によってつくられたともいえるかもしれない。

先秦時代の文字を概観してみよう。

殷代　甲骨文資料は十数万片。金文資料は一万余件。その他石刻、陶器に朱書きのものなど少量。甲骨文のほとんどは殷墟に集中している。金文は周の勢力圏から広く出土する。

周代　青銅器とその銘文は封建制度の維持にとって重要な意味があった。殷代にはなかった使用法である。（賞賜策命金文という）西周代の文字資料は金文がほとんどである。

西周初期金文　強い書風。大小の差。行間が狭く威厳があり規模が大きい。

西周前期金文　丸みのある線が現れる。大小の差が少なくなり、優雅になってくる。

西周中期金文　肥筆が減少。点画の線質が統一。丸みのある線が主体になり字粒がそろってくる。整然としてくるが力強さが希薄。行間、点画間が広くなり明るくなるが、しまりがなくなる。長脚化。縦横の文字の並びを整える意識が出てくる。

中期以後王権が衰えた。青銅器は諸侯製作器が増え、青銅器や金文の使われ方が変化した。嫁入り道具や領地の協定や裁判記録などが現れた。

西周後期金文　等質の線。小篆に近づく。構造に崩れ。生気がないものが増加。

東周時代（前 770 年～前 221 年）政治の激動期で思想が交錯した時代であり文字の多様化の時代であり書体が分化した時代であった。地域差が明確化し最後は一つに統一される時代であった。

春秋時代金文　金文は中国全土に見られるようになる。金文以外では盟書が出てくる。

戦国時代金文　装飾化と簡略化の二つに分かれる。内容が乏しくなり衰微していが、書体の分化と使用目的の多様化が進む。これまでの文字は王や有力氏族の権威の象徴であったが、文字は多くの人の目に触れるようになってきた。